

# 鵲狩

泉鏡花

青空文庫



初<sup>はつ</sup>冬<sup>ふゆ</sup>の夜更<sup>よふけ</sup>である。

片山<sup>かたやま</sup>津<sup>づ</sup>（加賀）の温泉宿、半月館<sup>げつげん</sup>弓野屋<sup>ゆのや</sup>の二階——だけれど、広い階子段<sup>はしごだん</sup>が途中で

一段大きく蛇<sup>うね</sup>つてS形に昇るので三階ぐらいに高い——取<sup>と</sup>着<sup>つき</sup>の扉<sup>ドア</sup>を開けて、一人旅の、

三十ばかりの客が、寝衣<sup>ねまき</sup>で薄<sup>うす</sup>ぼんやりと顚<sup>あ</sup>れた。

この、半ば西洋づくりの構<sup>かまえ</sup>は、日本間<sup>ふたまた</sup>が二室で、四角な縁が、名にしおうこの名所、

三湖の雄なる柴山<sup>しばやま</sup>潟<sup>がた</sup>を見晴しの露台<sup>あつらえ</sup>の詠<sup>よ</sup>ゆえ、硝子戸<sup>がらすど</sup>と二重を隔ててはいるけれど、霜

置く月の冷たさが、渺<sup>びよう</sup>々<sup>びよう</sup>たる水面から、自<sup>おの</sup>から沁<sup>しみ</sup>徹<sup>とお</sup>る。……

いま偶<sup>ふ</sup>と寢覚<sup>ふ</sup>の枕を上げると、電燈は薄暗し、硝子戸を貫いて、障子にその水の影さえ

映るばかりに見えたので、

「おお、寒い。」

頸<sup>えり</sup>から寒くなつて起きて出た。が、寝ぬくもりの冷めないうち、早く廁<sup>かわや</sup>へと思う急<sup>せき</sup>

心<sup>こころ</sup>に、向う見ずに扉<sup>ドア</sup>を押した。

押して出ると、不意に凄<sup>すこ</sup>い音で刎<sup>は</sup>返<sup>かえ</sup>した。ドーンと扉の閉るのが、広い旅館のがらんとした大天井から地の底まで、もつての外に響いたのである。

一つ、大きなものの音のしたあとは、目の前の階子段も深い穴のように見えて、白い灯も霜を敷いた状<sup>さま</sup>に床に寂しい。木目の節の、点々<sup>ぼつぼつ</sup>黒いのも鼠の足跡かと思われる。

まことに、この大旅館はがらんとしていた。――宵に受持の女中に聞くと、ひきつづきはつか二十日余りの間団体観光の客が立てつけて毎日百人近く込合ったそうである。そこへ女中がやつと四人ぐらいだから、もし昨日<sup>きのう</sup>にもおいでだと、どんなにお気の毒であつたか知れない。すっかり潮のように引いたあとで、今日はまた不思議にお客が少く、此室<sup>ここ</sup>に貴方<sup>あなた</sup>と、離室<sup>はなれ</sup>の茶室をお好みで、御隠居様御夫婦のお泊りがあるばかり、よい処で、よい折から――と言つた癖に……客が膳<sup>ぜん</sup>の上の猪口<sup>ちよく</sup>をちよつと控えて、それはお前さんたちさぞ疲れたろう、大掃除の後の骨休め、という処だ。ここは構わないで、湯にでも入ったら可<sup>よ</sup>からうと、湯治の客には妙にそぐわない世辞を言うと、言に随<sup>ことば</sup>いて、ではそうさして頂きます、後生ですわ、と膠<sup>にべ</sup>もなく引退<sup>ひきさが</sup>つた。畳も急に暗くなつて、客は胴震いをしたあとを呆<sup>あつ</sup>気に取られた。

……思えば、それも便宜<sup>たより</sup>ない。……

さて下りる階子段は、一曲り曲る処で、一度ぱつと明るく広くなっただけに、下を覗く  
 となお寂しい。壁も柱もまだ新しく、隙間<sup>すきま</sup>とてもないのに、薄い霧のようなものが、すつ  
 と這入<sup>はい</sup>つては、そつと爪尖<sup>つまさき</sup>を嘗<sup>な</sup>めるので、変にスリッパが迂<sup>すべ</sup>りそう、足許<sup>あしもと</sup>が覺束<sup>おぼつか</sup>  
 ない。

渠<sup>かれ</sup>は壁に掴<sup>つか</sup>まった。

掌<sup>てのひら</sup>がその壁の面に触れると、遠くで湯の雫<sup>しずく</sup>の音がした。

聞き澄<sup>すま</sup>すと、湯の水の、汀<sup>みぎわ</sup>の蘆間<sup>あしま</sup>をひたひたと音訪<sup>おとず</sup>れる氣勢<sup>けはい</sup>もする。……風は死んだの  
 に、遠くなり、近くなり、汽車が飮<sup>くだま</sup>するように、ゴーと響くのは海鳴<sup>うみなり</sup>である。

更に遠く来た旅を知りつつ、沈むばかりに階段を下切<sup>おりき</sup>った。

どこにも座敷がない、あつても泊<sup>とまりきやく</sup>客<sup>きやく</sup>のないことを知った長廊下の、底冷<sup>そこびえ</sup>のする板  
 敷を、影の徜徉<sup>さまよ</sup>うように、我ながら朦朧<sup>もうろう</sup>として辿<sup>たど</sup>ると……

「ああ、この音だった。」

汀の蘆に波の寄ると思つたのが、近々と聞える処に、洗面所のあつたのを心着いた。  
 機械口が緩<sup>ゆる</sup>んだままで、水が点滴<sup>したた</sup>っているらしい。

その袖壁の折角<sup>おれかど</sup>から、何心なく中を覗くと、

「あッ。」と、思わず声を立てて、ばたばたと後へ退った。  
雪のような女が居て、姿見に真蒼な顔が映った。  
温泉の宿の真夜中である。

二

客は、なまじ自分の他に、離室に老人夫婦ばかりと聞いただけに、廊下でいきなり、女の顔の白鷺に擦違つたように吃驚した。

が、雪のようなのは、白い頸だ。……背後むきで、姿見に向つたのに相違ない。燈の消えたその洗面所の囲が暗いから、肩も腰も見えなかつたのであろう、と、疑の幽霊を消しながら、やつぱり悚然として立淀んだ。

洗面所の壁のその柱へ、袖の陰が薄りと、立縞の縞目が映ると、片頬で白くさし覗いて、

「お手水……」

と、ものを忍んだように言った。優しい柔かな声が、思いなしか、ちらちらと雪の降り

かかるようで、再び悚然として息を引く。……

「どうぞ、こちらへ。」

と言った時は——もう怪しいものではなかった——紅鼻緒の草履に、白い爪さきも見えつつ、廊下を導いてくれるのであろう。小棲を取った手に、黒縹子の襟が緩い。胸が少しはだかつて、棲を引揚げたなりに乱れて、こぼれた浅葱が長く絡つた、ぼつとりものの中肉が、帯もないのに、嬌娜である。

「いや知っています。」

これで安心して、衝と寄りぎまに、斜に向うへ離れる時、いま見たのは、この女の魂だつたろう、と思うほど、姿も艶に判然して、薄化粧した香さえ薫る。湯上りの湯のにおいも可憐いまで、ほんのり人肌が、空に來て絡つた。

階段を這った薄い霧も、この女の氣を分けた幽な湯の煙であつたろうと、踏んだのは惜しい氣がする。

「何だろう、ここの女中とは思ふが、すばらしい中年増だ。」

手を洗つて、ガタン、トンと、土間穿の庭下駄を引摺る時、閉めて出た障子が廊下からすツと開いたので、客はもう一度ハツとした。

と小がくれて、その中年増がそこに立つ。

「これは憚り……」  
はばか

「いいえ。」

と、もう縞の小袖をしゃんと端折つて、昼夜帯を引掛に結んだが、紅い扱帯のどこかが漆の葉のように、紅にちらめくばかり。もの静な、ひとがらな、おっとりした、顔も下ぶくれで、一重瞼の、ずっと涼しいのが、ぽつと湯に染まって、眉の優しい、容子のいい女で、色はただ雪をあざむく。

「しかし、驚きましたよ、まったくの処驚きましたよ。」

と、懷中に突込んで来た、手巾で手を拭くのを見て、  
ふところ つつこ ハンケチ

「あれ、貴方……お手拭をと思いましたが、唯今お湯へ入りました、私のだもの  
あなた てぬぐい ただいま

ですから。——それに濡れてはおりますし……」

「それは……そいつは是非拝借しましょう。貸して下さい。」

「でも、貴方。」

「いや、結構、是非願います。」

と、うつかりらしく手に持った女の濡手拭を、引手繰るようにぐいと取った。

「まあ。」

「ばけものをする事だと思つて下さい。丑満時<sup>うしみつとき</sup>で、刻限が刻限だから。」

ほぼその人がらも分つたので、遠慮なしに、半調戯<sup>なかばからか</sup>うように、手どころか、するすると面<sup>おもて</sup>を拭いた。湯のぬくもりがまだ残る、木綿も女の膚<sup>はだ</sup>馴<sup>な</sup>れて、柔<sup>やわら</sup>かに滑<sup>なめら</sup>かである。

「あれ、お気味が悪うございましょうのに。」

と釣込まれたように、片袖を頬に当てて、取戻そうと差出す手から、ついと、あとじさりに離れた客は、手拭を人質のごとく、しかと取つて、

「気味の悪かつたのは只今でしたな——この夜ふけに、しかも、ここから、唐突<sup>だしぬけ</sup>だろう。」

そのまま洗面所へ肩を入れて、

「思いも寄らない——それに、余り美しい綺麗<sup>きれい</sup>な人なんだから。」

声が天井へもつき通して、廊下へも響くように思われたので、急に、ひっそりと声の調子を沈めた。

「ほんとうに胆<sup>きも</sup>が潰<sup>つぶ</sup>れたね。今思つてもぞツとする……別嬪<sup>べっぴん</sup>なのと、不意討で……」

「お巧言<sup>じょうず</sup>ばかり。」

と、少し身を寄せたが、さしうつむく。

「串戯じょうだんじゃありません。……（お手水……）の時のごときは、頭から霜を浴びて湯の底へ引込まれるかと思つたのさ。」

大袈裟おおげさに聞えたが。……

「何とも申訳がありません。——時ならない時分に、髪を結ったりなんかしましたものですから。——あの、実は、今しがた、遠方のお客様から電報が入りまして、この三時十分いぶりばしに動橋いぶりばしへ着きます汽車で、当方へおいでになるツて事だものですから、あとは皆年下みんなの女たちが疲れて寝ていますし……私がお世話を申し上げますので。あの、久しぶりで宵に髪を洗いましたものですから、ちよつと束ねておりました処なのでございますよ。」

いまは櫛くし巻まきが艶々つやつやしく、すなおな髪かみのふつきりしたのに、顔がやつれてさえ見えるほどである。

「女中部屋でいたせばようございますのに、床も枕も一杯になつて寝ているものでござい  
ますから、つい、一風呂頂きましたあとを、お客様のお使いになります処を拝借をいたし  
まして、よる夜中だと申すのに。……変化おぼけでございますわね——ほんとうに。」

と鬢びんに手を触つたまままた俯向うつむく。

「何、温泉宿の夜中に、寂しい廊下で出会すのは、そんなお化に限るんだけど、何てたって驚きましたよ——馬鹿々々しいほど驚いたぜ。」

言うまでもなく、女中と分つて、ものいいぶりも遠慮なしに、

「いまだに、胸がどきどきするね。」

と、どうした料簡だか、ありあわせた籐椅子に、ぐったりとなつて肱をもたせる。

「あなた、お寒くはございませんの。」

「今度は赫々とほてるんだがね。——腰が抜けて立てません。」

「まあ……」

### 三

「お澄さん……私は見事に強請つたね。——強請つたより強請だよ。いや、この時刻だから強盗の所業です。しかし難有い。」

と、枕だけ刎ねた寢床の前で、盆の上ながらその女中——お澄——に酌をしてもらつて、怪しからず恐悦している。

客は、手を曳ひいてくれないでは、腰が抜けて二階へは上あれないと、串じようだん戲ぎを真顔で強  
いると、ちよつと微笑ほほえみながら、それでも心しんから氣の毒そうに、否いやとも言わず、肩を並べ  
て、階はしごだん子段を——上あると蜿うねりしなの寂しい白い燈ひに、顔がまた白く、棲つまが青かった。客  
は、機会のこんな事は人間一生の旅行のうちに、幾いくた度もあるものではない。辻堂の中で  
三々九度の杯をするように一杯飲もう、と言った。——酒は、宵の、膳の三本めの銚ちようし子  
が、給仕は遁にげたし、一人では詰つまらないから、寝しなに呷あろうと思つて、それにも及ばず、  
ぐつすり寐ね込んだのが、そのまま袋戸棚の上に忍しのばしてある事を思い出したし、……また  
そうも言つた。——お澄が念のため時間を訊きいた時、懷中時計は二時半に少し間まがあつた。  
「では、——ちよつと、……掃除番の目ざとい爺やが一人起きましたから、それに言つて、  
心得こころえさす事がありますから。」と輕やわく柔らかにすり抜けて、扉ひらの口から引返す。……客に接し  
ては、草履を穿はかない素足は、水のように、段の中途でもう消える。……宵はぜに鯨はぜを釣落し  
た苦き經驗のある男が、今度は鱸すずきを水際で遁にした。あたかもその影を追うごとく、障子を  
開ひらけて硝がらす子戸越こしに湖うみを覗のぞいた。

連つらなり亘わたる山々の薄墨の影の消えそうなのが、霧の中に縁へりを繞めぐらず、湖うみは、一面の大なる  
銀盤である。その白銀しろがねを磨いた布目ばかりの浪もない。目の下の汀みぎわなる枯蘆かれあしに、縦横

に霜を置いたのが、天心の月に咲いた青い珊瑚珠さんごじゆのように見えて、その中から、瑪瑙めのうの棧さんに似て、長く水面を遙はるかに渡るのは別館の長廊下で、棟に欄干めぐらを繞した月の色と、露の光をうけるための台うてなのような建ものが、中空にも立てば、水にも映る。そこに鎖とぎした雨戸々々が透通つて、淡く黄を帯びたのは人なき燈ともしびのもれるのであろう。

鐘かねの音も聞えない。

潟、この湖の幅の最も広く、山の形の最も遠いあたりに、ただ一つ黒い点が浮いて見える。船か雁かりか、※かいつぶりか、ふとそれが月影に浮ぶお澄の、眉の下ほくろの黒子に似ていた。

冷える、冷い……女に遁げられた男はすぐに一すくみに寒くなった。一人で、蟻ありが冬ふゆご籠もりに貯えたような件くだんのその一銚ひとちようし子。——誰に習つていつ覚えた遣繰やりくりだか、小皿の小

鳥に紙を蔽おほうて、煽あおつて散らないように杉箸すぎばしをおもしに置いたのを取り出して、自棄やけに茶

碗で呷あつた処へ——あの、登音あしおとは——お澄が来た。「何もございせんけれど、」と、

いや、それどころか、瓜の奈良漬。「山家やまがですわね。」と胡桃くるみの砂糖煮。台十能だいじゆうに火を

持つて来たのを、ここの火鉢と、もう一つ。……段の上り口の傍わきに、水屋のような三疊が

あつて、瓶掛びんかけ、茶道具の類が置いてある。その火鉢とへ、取分けた。それから隣座敷

へ運ぶのだそうで、床の間の壁裏が、その隣座敷。——「旦那様の前でですけど、この二室ふたまた

が取つて置きの上等」で、電報の客というのが、追つてそこへ通るのだそうである。――

「まあお一杯ひとつ。……お銚子が冷めますから、ここでお燗かんを。ぶしつけですけれど、途中が

遠うございますから、おかわりの分も、」と銚子を二本。行届いた小取まわしで、大びけ

すぎの小酒こざかもり。北の海なる海鳴うみなりの鐘に似て凍る時、音に聞く……安宅あたかの関は、この辺あたり

から海上三里、弁慶がどうしたと？ 石川県能美郡片山津の、直なおぎむらい侍とは、こんなも

のかと、客は広袖どてらの襟を撫なでて、胡坐あぐらで納まったものであった。

「だけど……お澄さんあともう十五分か、二十分で隣座敷となりへ行つてしまわれるんだと思う

と、情なさけない気がするね。」

「いいえ。――まあ、お重ねなさいまし、すぐにまたまいります。」

「何、あつちで放すものかね。――電報一本で、遠くから魔術のように、旅館の大戸をが

らからと開けさせて、お澄さんに、夜中に湯をつかわせて、髪を結わせて、薄化粧で待た

せるほどの大したお客なんだもの。」

「まあ、……だつて貴方、さばき髪でお迎えは出来ないではございませんか。――それに、

手順で私が承りましたばかりですもの。何も私に用があつていらつしやるものではありません

ん。唯今は、ちようど季節だものでございますから、この瀉へ水鳥を撃ちに。」

「ああ、銃獵に——鳴かい、鳴かい。」

「はあ、鴨も鴨も居ますんですが、おもに鵜をお撃ちになります。——この間おいでになりました時などは、お二人で鵜が、一百二十三十も取れましてね、獵袋に一杯、七つも持つてお帰りになりましたんですよ。このまだ陽が上りません、霜のしらあけが一番よく取れますって、それで、いま時分お着になります。」

「どこから来るんだね、遠方ツて。」

「名古屋の方でございますの。おともの人と、犬が三頭、今夜も大方そうなのでございましょうよ。ここでお支度をなさる中に、馴れました船頭が参りますと、小船二艘でお出かなさるんでございますわ。」

「それは……対手は大紳士だ。」と客は歎息して怯えたように言った。

「ええ、何ですか、貸座敷の御主人なんでございます。」

「貸座敷——女郎屋の亭主かい。おともはざつと幫間だな。」

「あ、当りました、旦那。」

と言ったが、軽く膝で手を拍つて、

「ほんに、辻占がよくつて、獵のお客様はお喜びでございましょう。」

「お喜びかね。ふう成程——ああ大した勢いだね。おお、この静寂な霜の湖を船で乱して、  
 鴛が白山へドーンと響くと、寝ぬくまった目を覚して、蘆の間から美しい紅玉の陽の影  
 を、黒水晶のような羽に鏤めようとする鷗が、一羽ぱたりと落ちるんだ。血が、ぽたぽた  
 と流れよう。犬の口へぐたりとはまって、水しぶきの中を、船へ倒れると、ニタニタと笑  
 う貸座敷の亭主の袋へ納まるんだな。」

お澄は白い指を扱きつつ、うつかり聞いて顔を見た。

「——お澄さん、私は折入って姐さんをお願いが一つある。」

客は膝をきめて居直ったのである。

#### 四

渠は稲田雪次郎と言う——宿帳の上を更めて名を言った。画家である。いくたびも生  
 死の境にさまよいながら、今年初めて……東京上野の展覧会——「姐さんは知っている  
 か。」「ええこの辺でも評判でございます。」——その上野の美術展覧会に入選した。

構図というのが、湖畔の霜の鷗なのである。——

「鵜は一生を通じての私のために恩人なんです。生命いのちの親とも思う恩人です。その大恩のある鵜の一群が、夫も妻も娘も倅せがれも、貸座敷の亭主と幫間の鉄砲くちを食くらつて、一時いつときに、一百二十つそく三すつ、袋へ七つも詰込まれるんでは遣切やりきれない。——深更よふけに無理を言つてお酌をしてもらうのさえ、間違つてゐる処へ、こんな馬鹿な、無法な、没常識な、お願いと言つちやあないけれど、頼むから、後生だから、お澄さん、姐さんの力で、私が居る……この朝だけ、その鵜撃うちを留めやさしてはもらえないだろうか。……男だてなら、あの木曾川ので、留とめて見ると言つたつて、水の流ながれは留められるものではない。が、女の力だ。あなた的情なさけだ。——この潟の水が一時凍らないとも、火にならないとも限らない。そこが御婦人の力です。勿論まるきり、その人たちに留めやさせる事の出来ない事は、解つて、あきらめなければならぬまでも、手筈てはずを違えるなり、故障を入れるなり、せめて時間でも遅れさして、鵜が明らかに夢からさめて、水鳥相当に、自衛の守備の整うようにして、一羽でも獲ものの方が少く、鳥の助かる方が余計にしてもらいたい。——実は小松からここに流れるかけはしがわ 川で以前——雪間の白鷺を、船で射た友だちがあつて、……いままですらりと立つて遊んでいたのが、弾丸たまの響ひびきと一所に姿が横に消えると、颯さつと血が流れたという……話を聞いた事があつて、それ一羽、私には他人の鷺でさえ、お澄さんのような女が殺されで

もしたように、悚然として震え上った。——しかるに鵲は恩人です。——姐さん、これはお酌を強請ったような料簡ではありません。真人間が、真面目に、師の前、両親の前、神仏の前で頼むのとおなじ心で云うんです。——私は孤児ですが、かつて志を得たら、東京へ迎えます。と言ううちに、両親はなくなりました。その親たちの位牌を、……上野の展覧会の今最中、故郷の寺の位牌堂から移して来たのが、あの、大な革靴の中に据えてあります。その前で、謹んで言うのです。——お位牌も、この姐さんに、どうぞお力をお添え下さい。」

と言った。面が白蠟のように色澄んで、伏目で聞入ったお澄の、長い睫毛のまたたくとともに、床に置いた大革靴が、揺れて熊の動くように見えたのである。

「あら！ 私……」

この、もの淑なお澄が、慌しく言葉を投げて立った、と思うと、どこどこかと階子段を踏立てて、かかる夜陰を憚らぬ、音が静寂間に湧上った。

「奥方は寢床で、お待ちで。それで、お出迎えがないといった寸法でげしう。」

と下から上へ投掛けに肩へ浴びせたのは、旦那に続いた件の幫間と領かれる。白い呼吸もほッほッと手に取るばかり、寒い声だが、生ぬるいことを言う。

「や、お澄——ここか、座敷は。」

扉ドアを開けた出會頭であいがしらに、爺おややが傍そばに、供が続いて突立つったった忘八くつわの紳士が、我がために髪を結つて化粧したお澄の姿に、満悦みんえつらしい鼻声はなこゑを出した。が、氣疾きはやに頸くびからさきへ突込つっこむ目に、何と、閨ねやの枕まくらに小ぢかもり、媚薬びやくを髻髻ほうふつとさせた道具が並んで、生白なましろけた雪次郎しょうが、しまの広袖ひろそでで、微醉ほろよゐで、夜具もたに凭もたれていたろうではないか。

正しょうの肌身しんみはそこで藻抜もぐけけて、ここに空蟬うつせみの立つようなお澄は、呼吸いきも黒くなる、相撲取すもうほど肥ふつた紳士しんしの、臘虎襟らつこゑりの大外套おおがいてうの厚い煙えんに包まれた。

「いつもの上段まの室むろでございますことよ。」

と、さすが客商売かしょうばいの、透かさず機嫌きげんを取つて、扉隣ドアへ導くと、紳士の開閉あけたての乱暴らんぼうさは、ドンドンドン、続けさまに扉が鳴つた。

## 五

「旦那だんなは——ははあ、奥方様おくさまと成程。……それから御入浴ごにやくという、まずもつての御寸法。——そこでげす。……いえ、馬鹿ばかでもそのくらいな事は心得こころえておりますんで。……しかし

御口<sup>ごこうちゆう</sup>中ぐらになさいませんと、これから飛道具を扱います。いえ、第一遠く離れていらつしやるで、奥方の方で御承知をなさいますまい。はははは、御遠慮なくお先へ。……しかしてその上にゆつくりと。」

階子段<sup>はしごだん</sup>に足踏<sup>あしづみ</sup>して、

「鵜だよ、鵜だよ、お次の鵜だよ、晩の鵜だよ、月の鵜だよ、深夜<sup>よなか</sup>の鵜だよ、トンと打<sup>ぶ</sup>つてトントントンとサ、おつとそいつは水鶏<sup>くいな</sup>だ、水鶏だ、トントントントン。」と下りて行く。

あとは、しばらく、隣座敷に、火鉢があるまいと思うほど寂寞<sup>ひっそり</sup>した。が、お澄のしめやかな声が、何となく雪次郎の胸に響いた。

「黙れ！」

と梁<sup>はり</sup>から天井へ、つつぬけにドス声で、

「分った！　そうか。三晩つづけて、俺が鵜撃に行つて怪我をした夢を見たか。そうか、分った。夢がどうした、そんな事は木片<sup>こっば</sup>でもない。——俺が汝等<sup>うぬら</sup>の手で面<sup>つら</sup>へ溝泥<sup>どぶどろ</sup>を塗られたのは夢じやないぞ。この赫<sup>かっ</sup>と開けた大きな目を見ろい。——よくも汝<sup>うぬ</sup>、溝泥を塗りおつたな。——聞えるか、聞えるか。となりの野郎には聞えまいが、このくらいな大声だ。

われが耳は打ぬいたろう。どてツ腹へ響いたろう。」

「響いたがどうしたい。」と、雪次郎は鸚鵡がえしで、夜具に凭れて、両の肩を聳やかした。そして身構えた。

が、そのまま何もなくバツタリ留んだ。——聞け、時に、ピシリ、ピシリ、ピシヤリと肉を鞭打つ音が響く。チンチンチンチンと、微に鉄瓶の湯が沸るような音が交る。が、それでないと、湯気のけはいも、血汐が噴くようで、凄じい。

雪次郎はハツと立つて、座敷の中を四五度廻った。——衝と露台へ出る、この片隅に二枚つづきの硝子を嵌めた板戸があつて、青い幕が垂れている。晩方の心覚えには、すぐその向うが、おなじ、ここよりは広い露台で、座敷の障子が二三枚覗かれた——と思う。：そのまま忍寄つて、密とその幕を引なぐりに絞ると、隣室の障子には硝子が嵌め込になつていたので、一面に映るように透いて見えた。ああ、顔は見えないが、お澄の色は、あの、姿見に映つた時とおなじであろう。真うつむけに背ののめつた手が腕のつけもとまで、露呈に白く捻上げられて、半身の光沢のある真綿をただ、ふつくりと踵まで畳に裂いて、二三条引伸ばしたようにされている。——ずり落ちた帯の結目を、みしと踏んで、片膝を胴腹へむずと乗掛つて、忘八の紳士が、外套も脱がず、革帯を陰気に重く光らしたの

が、鉄の火箸で、ため打ちにピシヤリ打ちピシリと当てる。八寸釘を、横に打つようなこの拷掠に、ひつつる肌に青い筋の蜿るのさえ、紫色にのたうちつつも、お澄は声も立てず、呼吸さえせぬのである。

「ええ！　ずぶてえ阿魔だ。」

と、その鉄火箸を、今は突刺しそうに逆にとった。

この時、階段の下から登音が来なかったら、雪次郎は、硝子を破って、血だらけになつて飛込んだらう。

さまでの苦痛を堪えたな。——あとでお澄の片頬に、畳の目が鑢のようについた。横顔で突づいて歯をくいしばつたのである。そして、そのくい込んだ畳の目に、あぶら汗にへばりついて、鬢のおくれ毛が彫込んだようになっていた。その髪の一糸を、雪次郎が引いてとつた時、「あ痛、」と声を上げたくらいであるから。……

かくまでの苦痛を知らぬ顔で堪えた。——幫間が帰つてからは、いまの拷掠については、何の気色もしなかつたのである。

銃獵家のいいつけでお澄は茶漬の膳を調えに立つた。

扉から雪次郎が密と覗くと、中段の処で、肱を硬直に、帯の下のを腰を圧えて、片手をぐ

つたりと壁に立つて、倒れそうにうつむいた姿を見た。が、氣勢けはいがしたか、ふいに真青まっさおな顔して見ると、寂しい微笑を投げて、すつと下りたのである。

隣室には、しばらく賤いやしげに、浅ましい、売女商売の話が続いた。

「何をしてうせおる。——遅いなあ。」

二度まで爺やが出て来て、催促をされたあとで、お澄が膳を運んだらしい。

「何にもございません。——料理番がちよと休みましたものですから。」

「奈良漬、結構。……お弁当もこれが関でげすぜ、旦那。」

と、幫間が茶づけをすする音、さらさらさら。スウーと齒ぜせりをしながら、

「天気は極上、大狛でげすぜ、旦那。」

「首途かしでに、くそ忌々いまいましい事があるんだ。どうだかなあ。さらけ留やめて、一番新地で飲ん

だろうかと思うんだ。」

## 六

「貴方あなた、ちよつと……お話がございます。」

——弁当は帳場に出来ているそうだが、船頭の来ようが、また遅かった。——

「へい、旦那御機嫌よう。」と三人ばかり座敷へ出ると、……「遅いじゃねえか。」とその御機嫌が大不機嫌。「先刻お勝手へ参りましただが、お澄さんが、まだ旦那方、御飯中で、失礼だと言わっしやるものだで。」——「撃つぞ。出ろ。ここから一発はなしたろか。」と銃狛家が、怒りだちに立った時は、もう横雲がたなびいて、湖の面がほんのりと青ずんだ。月は水線に玉を沈めて、雪の晴れた白山に、薄紫の霧がかかったのである。

早いもので、湖に、小さい黒い点が二つばかり、霧を曳いて動いた。船である。

睡眠は覚めたらう。翼を鳴らせ、朝霜に、光あれ、力あれ、寿かれ、鷓よ。

雪次郎は、しかし、青い顔して、露台に湖に面して、肩をしめて立っていた。

お澄が入って来た——が、すぐに顔が見られなかった。首筋の骨が硬ばったのである。

「貴方、ちよつと……お話がございます。」

お澄が静にそう言うのと、からからと釣を手繰って、露台の硝子戸に、青い幕を深く蔽うた。

闇の障子はまだ暗い。

「何とも申しようがない。」

雪は、となつて手を支いた。

「私は懺悔をする、皆嘘だ。——画工は画工で、上野の美術展覧会に出しは出したが、まったくの処は落第したんだ。自棄まぎれに飛出したんで、両親には勘当はされても、位牌に面目のあるような男じゃない。——その大革鞆も借ものです。樊噲の盾だと言つて、貸した友だちは笑つたが、しかし、破りも裂きも出来ないのです、そのなかにたたき込んである、鵠を画いたのは事実です。女郎屋の亭主が名古屋くんだりから、電報で、片山津の戸を真夜中にあけさせた上に、お澄さんほどの女に、髪を結わせ、化粧をさせて、給仕につかせて、供をつれて船を漕がせて、湖の鵠を狙撃に撃つて廻る。犬が三頭——三疋とも言わないで、姐さんが奴等の口うつしに言うらしい、その三頭も癪に障った。なにしろ、私の画が突如ねられたように口惜かった。嫉妬だ、そねみだ、自棄なんです。——私は鵠になったんだ。——鵠が命乞いに來た、と思つて堪えてくれ、お澄さん、堪忍してくれたまえ。いまは、勘定があるばかりだ、ここの勘定に心配はないが、そのほかは何にもない。——無論、私が志を得たら……」

「貴方。」

とお澄がきつぱり言つた。

「身を切られるより、貴方の前で、お恥かしい事ですが、親兄弟を養いますために、私はとうから、あの旦那のお世話になつておりますんです。それも棄て、身も棄てて、死ぬほどの思いをして、あなたのお言葉を貰きました。……あなたはここをお立ちになると、もうその時から、私なぞは、山の鳥です、野の薊あざみです。路傍みちばたの塵ちりなんです。見返りもありませんまい。——いいえ、いいえ……それを承知で、……覚悟の上でした事です。私は女が一生に一度と思う事をしました。貴方、私に御褒美を下さいまし。」

「その、その、その事だよ……実は。」

「いいえ、ほかのものは要りません。ただ一品ひとしな。」

「ただ一品。」

「貴方の小指を切つて下さい。」

「……………」

「澄に、小指を下さいまし。」

少からず不良性を帯びたらしいまでの若者が、わなわなと震えながら、

「親が、両親ふたおやがあるんだよ。」

「私にもございますわ。」

と凜りんと言った。

拳こぶしを握ぎつて、屹きつと見て、

「お澄さん、剃刀かみそりを持もっているか。」

「はい。」

「いや、——食切くいぎつてくれ、その皓齒しろはで。……潔くあなたに上げます。」

やがて、唇にふくまれた時は、かえつて稚児おきなこが乳を吸うような思いがしたが、あとの

疼痛いたみは鋭えいかった。

渠かれは大夜具を頭から引被ひつかぶった。

「看病をいたしますよ。」

お澄は、胸白く、下じめの他ほかに血が浸にじむ。……繻子しゆすの帯がするすると鳴った。

大正十二（一九二三）年一月



# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二巻」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 鵲狩

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>